

# 紀 要

## 第 7 号

---

### 目 次

|                                      |            |     |
|--------------------------------------|------------|-----|
| 二つの前方後円墳 .....                       | (細川修平)...  | 1   |
| 滋賀県出土の埴輪資料集(その4) .....               | (稲垣正宏)...  | 27  |
| 近江へのアプローチ・その1 .....                  |            | 43  |
| 1. 高島郡の地形と条里 .....                   | (神保忠宏)...  | 44  |
| 2. 高島郡における遺跡の動態 —今津町周辺をフィールドに— ..... | (畑中英二)...  | 50  |
| 3. 高島郡の古代寺院 .....                    | (重岡卓)...   | 57  |
| 4. 高島郡の鉄生産とその周辺 .....                | (大道和人)...  | 61  |
| 5. 高島郡の古代北陸道 .....                   | (内田保之)...  | 66  |
| 6. 高島郡にみる古代国家 .....                  | (細川修平)...  | 71  |
| 南北方位建物についての研究ノート .....               | (田井中洋介)... | 77  |
| 近江京域論の再検討・予察—7世紀における近江南部地域の諸相— ..... | (相原嘉之)...  | 83  |
| 滋賀県における古代の土器様相・その1                   |            |     |
| —湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に— .....   | (畑中英二)...  | 104 |
| 江州農具雑想ノート .....                      | (上垣幸徳)...  | 126 |
| 滋賀県甲賀郡土山町における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布        |            |     |
| —土山町石造美術石材分布調査概要— .....              | (兼康保明)...  | 131 |
| 滋賀県内出土漆製品集成—後編— .....                | (中川正人)...  | 145 |

---

1994. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

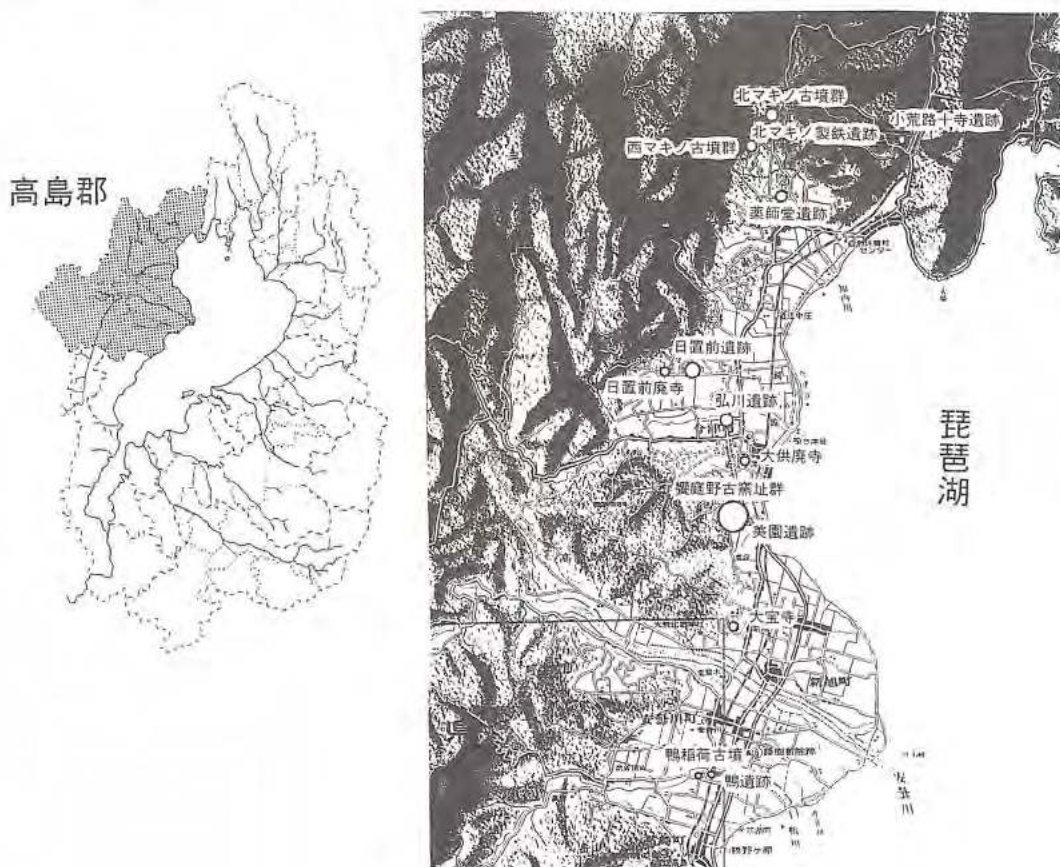
# 近江へのアプローチ・その1

## はじめに

近年、発掘調査によってもたらさせる資料数は極めて膨大で、個々の資料そのものが持つ問題点も多岐にわたり枚挙に暇がない。考古資料を中心に用いた一地域史の叙述は極めて困難な作業であるといえる。小稿は「近江」を中心とする地域研究という日暮れて道遠いこの作業を、財団法人滋賀県文化財保護協会の有志による共同研究を行い、少しでも前進させようという試みである。

今回は、滋賀県北西部に位置する高島郡の地域史について、古代を中心とする時代の地形と条里、古代道の復元、遺跡の立地の特性、瓦の動向、手工業生産(鉄生産)、古墳時代から古代にかけての国家との関わりについてふれることとした。

これらのアプローチで全ての問題についてふれているとはいえないが、地域研究の一助となることを願うものである。また、個々の論考については諸兄姉からの御教示、御批判を賜りたい。



今回ふれる主な遺跡

### 3. 高島郡の古代寺院

重岡 卓

高島郡内では、現在5ヶ所の寺院跡が知られている。しかし、いずれも発掘調査による遺構の確認はされていない。それらの概要を述べた後、表採された瓦により各寺院の設立年代とその性格を検討したい。

#### 1. 立地と現況

- a 大宝寺 新旭町大字熊野本字御屋敷に所在し、安曇川の沖積平野を一望する丘陵上に位置する。戦後の農地開拓にともない、二系統四種の軒丸瓦、三重弧文と唐草文の二種の軒平瓦、鷗尾、埴仏等が出土した。現在は一面キャベツ畑になっている。その北端のやや奥まったところに土壇が存在するが、寺域、伽藍配置などは不明である。
- b 藁藪廃寺 新旭町大字藁藪付近に位置する。『続日本紀』の記事に見えるが<sup>(1)</sup>、長い間位置が不明であった。国道161号バイパス新旭交差点付近から素弁十葉軒丸瓦が1点と<sup>(2)</sup>、「藪寺」の墨書土器が出土した<sup>(3)</sup>。そのため、この付近に藁藪廃寺が存在したと思われる。
- c 大町廃寺 新旭町大字岡字大町の木津の港をみおろす小丘陵上で、著しく風化した単弁八葉軒丸瓦が1点出土した。しかし、詳細は不明である。
- d 大供廃寺 今津町大供の琵琶湖を一望できる中位段丘上に位置し、寺或は天神住宅とほぼ重複しているようである。現在、二系統二種の軒丸瓦と三重弧文と二重弧文の二種の軒平瓦の出土や基壇の存在が知られている。昭和58・59年に今津町教育委員会が、集落の東、字「大門」で発掘調査を行なった<sup>(4)</sup>が、寺院に関する遺構、遺物は見つからなかった。遺跡の西の丘陵中には瓦窯が残存しており、ここから単弁八葉軒丸瓦が出土している。この瓦は、大供廃寺出土のものと同じであり、すぐ東に位置する大供廃寺に瓦を供給したものである。
- e 日置前廃寺 今津町大字三谷に位置する。宅地造成の際に、行基瓦や礎石が出土し、塔跡と考えられる土壇も存在する。

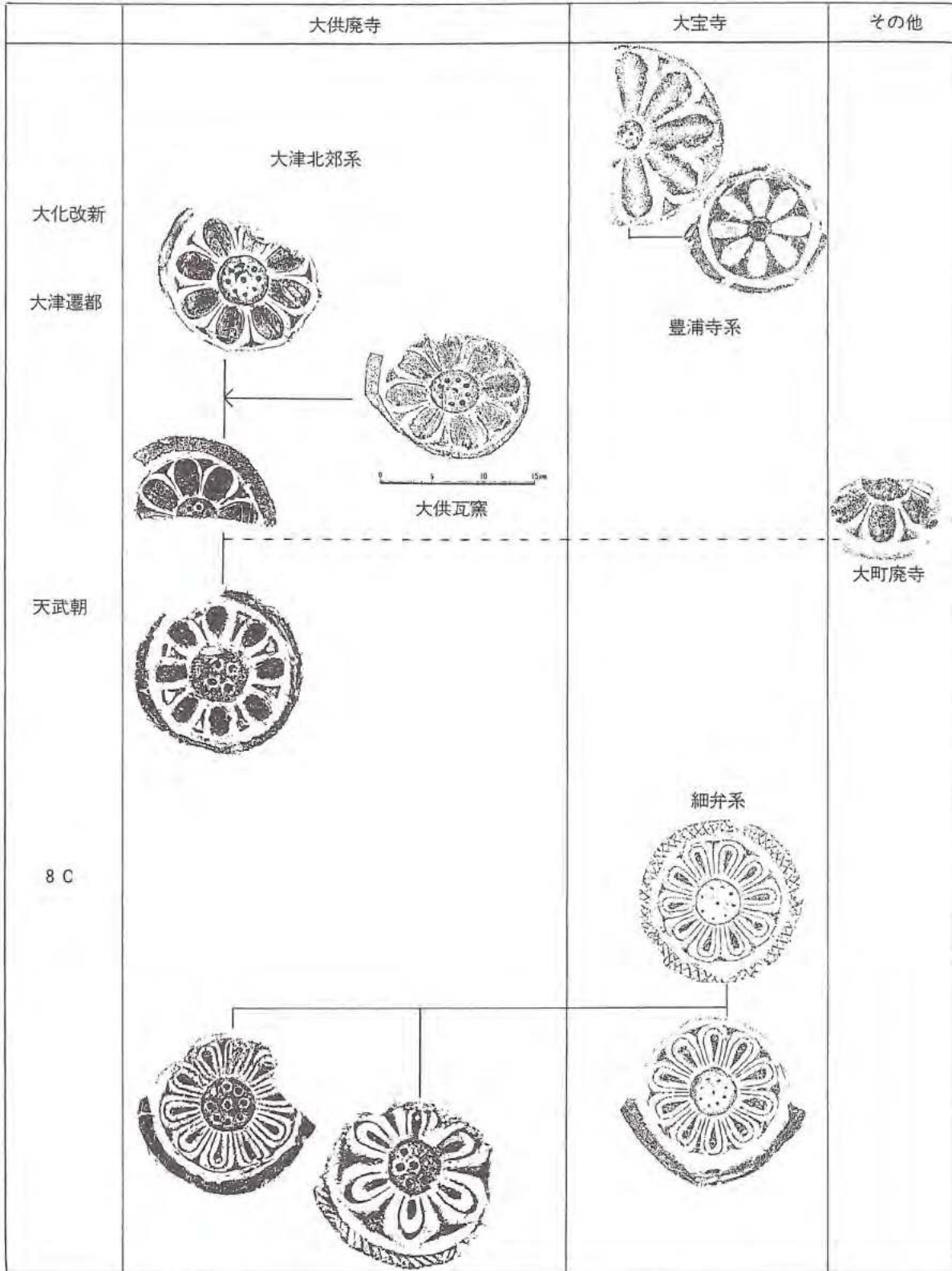
#### 2. 各寺院の設立年代の検討

各寺院より出土した瓦によって、時代別に概観したい。

大宝寺で飛鳥時代のものとおもわれる豊浦寺系の有稜線弁八葉軒丸瓦が出土している。これは、弁の表現などに違いがみられるものの、穴太廃寺出土軒丸瓦と同系統と思われる。飛鳥時代の寺院は現在近江に衣川廃寺・穴太廃寺と大宝寺の3ヶ所しか確認されておらず、大宝寺が非常に早い段階で建立されたことを示す。

次に、穴太廃寺や南滋賀廃寺の瓦と同系統の弁の先端がとがった単弁八葉軒丸瓦が大供廃寺で出土しており、7世紀第3四半期に入った段階で大供廃寺が建立されたと考えられる。この時期は、近江全体に寺院設立の動きが盛んにみられる時期で、大供廃寺の設立も、そうした動きの一

高島郡主要古代寺院軒丸瓦関係図





つとして捕らえることもできる。この系統の瓦は、湖南地方でも多くみられ、大供廃寺が大津北郊の各寺院や湖南地方と強いつながりがあったことを示す。一方、大宝寺ではこの時期の瓦は出土していない。このことは、大宝寺を設立した勢力の弱体化を示すかもしれない。また、大町廃寺で同様の瓦が出土しているが、風化が激しく、また、出土点数も少ないため、詳細は不明である。

格子線文縁細弁十葉軒丸瓦が多く出土していることから、8世紀初頭に入って、再び大宝寺が整備されたようである。それが退化し、外縁が無文となった軒丸瓦が、大宝寺、大供廃寺の双方で出土している。このことから大供廃寺もやや遅れて再整備されたと同時に、両寺院に密接な関係があったことがわかる。大供廃寺では、独自の斜線文縁を持つ単弁6葉軒丸瓦が出土している。これは、弁の表現方法などから奈良時代のものと思われ、大供廃寺がこの時期まで存続したことを示す。また、この時期に日置前廃寺が建立されたようである。

平安時代には、この時期の瓦が見つかっていないことから、各寺院とも衰退する傾向を示す。ただ、藁蕨廃寺からは、素弁十葉軒丸瓦が出土している<sup>(2)</sup>。

### 3. 各寺院の性格

ここでは、表採された瓦によって、ある程度詳細のわかる大宝寺と大供廃寺の2ヶ寺を中心に、時代を追って検討したい。

大宝寺から有稜線弁八葉軒丸瓦が出土していることは先に述べた。穴太廃寺で出土している豊浦寺系瓦より稜の表現方法などの退化が現われている。しかし、全体の構成が似ていることから、時期差は大きくないとおもわれる。こうした事実からすれば、大宝寺の設立は前述のとおり、飛鳥時代にまでさかのぼるといえるだろう。このことは、高島郡の豪族の勢力の大きさを示すと同時に、穴太廃寺の設立者である渡来系氏族と当地の豪族がなんらかの関係で結ばれていたことをも示している。高島郡の豪族が、扇状に広がる安曇川平野のかなめの丘陵上に、当時の先端技術を用いて寺を設立し、その権勢を誇ったのである。

大供廃寺では、南滋賀廃寺出土の素弁八葉軒丸瓦と同じ系統の瓦が出土している。この瓦は、大津宮周辺の各寺院や、草津市の観音寺や宝光寺、栗東町の手原廃寺、野洲町の北村廃寺など、湖南地域に多くみられる。この瓦は、天智朝のシンボリックな意味を持ち地域に波及したと言われる<sup>(6)</sup>。大津宮設立に関与した漢人系渡来人の技術が、この地域に展開したことを示す。同時に、漢人系渡来人の技術を支配した中央権力の影響が、湖南地域一帯に及んだことの表れと考えられる。言い替えるならば、この瓦を用いることにより、天智朝の中で、地位を得た豪族として自己表現するものである<sup>(7)</sup>。大供廃寺でも、その建立に当り、都・大津からの技術のながれがあったといえよう。この段階に、高島北半の豪族に地位を与えることで、都に北接し、北陸方面への入口となる高島郡にも中央権力が介入してくるのである。そして、中央権力のもとでその重要性に見合ったモニュメントとして大供廃寺の偉容が整えられたと思われる。このことは、大供廃寺が北陸道と若狭への道の分岐点を見下ろす丘陵上という、大変に重要な位置にあることからもうなずける。しかし、大宝寺からはこの時期に該当する瓦は出土していない。この時期には、北陸道に近接する重要な位置にあるにもかかわらず、大宝寺への労働力の投下が許されなかったことによると思

われる。これは、大津宮の時代には、前に述べたような大宝寺の持つ私的性格が中央権力により否定されたことを示す。つまり、前代には自らの大きな勢力を自由に誇示できた当地の豪族も、この時期には、その勢力にある程度の制限を受けたのである。それに変わって、中央権力の影響下に北陸道と若狭への道の分岐点で都の北の入口という重要な地である大供に寺院が建立されたとおもわれる。

奈良時代以降、高島郡では中央の主要な系統に属する瓦は見つかっていない。近江の他の地域では、川原寺系や山田寺系、法隆寺式などの中央寺院の影響を強く受けた瓦が出土することは、中央からの技術の流れのみならず、強い関係の存在をも示す。これにたいし、高島郡内では大宝寺が再整備されたり、日置前廃寺が設立されるなど、寺院設立の動きは盛んであるのに、独自の細弁十葉軒丸瓦しか出土していない。このことから、瓦を視点として考えたとき、大津宮の段階では、都の入口として、中央との強い関係のあった高島郡も、都が大和へと移り、その特別な地位を失った後は、先関係を維持できず、一地方の地位に転落したといえる。

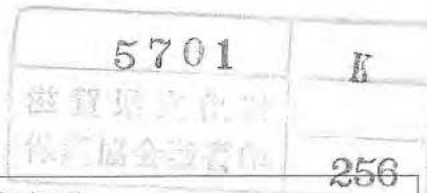
この文を作成するにあたり、小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通『近江の古代寺院』（真陽社 1989年）の「近江古代寺院総説」（小笠原好彦）、「大供廃寺」・「藁園寺跡」（西田弘）、「大宝寺」（林博通）を基礎資料として使用した。

#### 註

- (1) 『続日本紀』卷二十七 天平神護二年九月の条につぎの記事がみえる。  
「九月己未賜助官軍近江國僧沙彌及錦部藁園（異本藁園）二寺壇越詣寺奴等物各有差」（国史大系本による）  
また、「山背國愛宕郡計帳」に、  
「從父兄壬生逆年參拾參歲正丁右二人和銅五年逃近江國高島郡藁園」（『寧樂遺文』上）とある。  
前者では、「藁園」が「近江國」とだけあり、高島郡とは明示されていない。後者では、「藁園」が寺であるのかが不明である。
- (2) 兼康保明・清水尚・堀内宏司「正伝寺南遺跡の調査」（『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和五七年度）』3 1983年）
- (3) 兼康保明・尾崎好則・前角和夫「針江南遺跡の調査」（『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和五八年度）』4 1984年）
- (4) 葛原秀雄ほか「大供遺跡発掘調査概報」（『今津町文化財調査報告』第2集 1983年）  
同「大供遺跡発掘調査概要報告書」（『今津町文化財調査報告』第3集 1984年）
- (5) 細川修平「南滋賀廃寺の建立」（『滋賀考古学論叢』第5集 1992年）

編集後記

今年度は雨が多く冷夏であり、どの現場もいたずらに排水作業を繰り返し時間に追われて苦悩の日々を過ごされたことと思います。本紀要も、第7号を迎え、本号には予想を越える14編の論考を掲載することが出来ました。調査に追われながらも、日頃の各自の問題意識と研鑽の結果であるといえるでしょう。本号が「近江」や「文化財」への理解の一助となり、読者の方々からの御指導、御鞭撻が賜れば幸いです。



平成6年3月

紀要 第7号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
Tel(0775)33-1241